

近代短歌の中の古今和歌集

― 正岡子規を例として ―

鈴木 宏子

千葉大学・教育学部

Kokinwakasyuu in Tanka

― Taking the Case of Masaoka Shiki ―

SUZUKI Hiroko

Faculty of Education, Chiba University, Japan

明治期に短詩型の革新を志した正岡子規は「歌よみに与ふる書」において、『古今和歌集』は「くだらぬ集」であり、紀貫之は「へたな歌よみ」であると痛罵した。この文章は、時代の文脈から切り離されて、現在に至るまで『古今集』のイメージに悪影響を及ぼしている。しかし子規自身の最晩年の歌の中にも、『古今集』的な「こころ」や「ことば」の伝統が色濃く感じられる例がある。このような近代短歌と古典和歌のあいだに存在する連続性を認識することから、文学や言語についてのより豊かな考察が可能になると考える。

キーワード：和歌 (Waka) 近代短歌 (Tanka) 古今和歌集 (Kokinwakasyuu) 正岡子規 (Masaoka Shiki) 歌よみに与ふる書 (Urayominiatafurusyo)

一 古今和歌集は人気がないか？

『古今和歌集』は最初の勅撰和歌集であり、古典中の古典として、千百年余りにわたって読み継がれてきた。中学校の国語教科書には「万葉・古今・新古今」と三つの歌集を並べた単元が設けられているし、日本史においても、最初の勅撰和歌集である『古今和歌集』の成立は、文化史上の特筆すべき出来事として明記されている。私たちは学校教育の中で『古今集』に出会っている。しかし現在『古今集』の人気はあまり高いとは言えないようである。現代の私たちは忙しい。知りたいことも知らねばならないことも、山ほどある。古色蒼然とした古典文学、とりわけ、教室においてほんの数回遭遇しただけの古典和歌が、読者を獲得できないのも仕方がないのだろうか。

けれども書店を歩くと、古典和歌の本もそれなりに書架に並んでおり、手に取る人々も存在しているのである。たとえば『万葉集』。日本最古の歌集、古代人の息吹に触れる、天皇から庶民までの歌を集めた「国民歌集」^[*]といったイメージは、十分に私たちの心をひきつける。また『百人一首』。「百」という区切りのよいワンセット、個々の歌人のエピソード、競技カルタとの結びつきなど、さまざま要素が現在の読者の興味を誘っている。ひとたび手に取ってみれば、古典和歌は案外面白い。そして『百人一首』の四分の一は『古今集』由来の歌なのである。

二 正岡子規の呪縛

古典文学に興味のある人々が『古今集』を敬遠するとしたら、近代短歌の黎明期

における正岡子規（慶応三年（一八六七）～明治三十五年（一九〇二））の痛罵が、未だに影を落としているのかもしれない。

短歌の革新を志した子規が、まずは伝統の要に位置する『古今集』に一撃を加えることから出発した事実は、広く知られている。次に引用するのは、明治三十一年（一八九八）二月十四日に新聞『日本』に掲載された「再び歌よみに与ふる書」の冒頭部分である。

貫之はへたな歌よみにて『古今集』はくだらぬ集に有之候。その貫之や『古今集』を崇拜するは誠に気の知れぬことなどと申すものの、実はかく申す生も数年前までは『古今集』崇拜の一人にて候ひしかば、今日世人が『古今集』を崇拜する気味合は能く存申候。崇拜してゐる間は誠に歌といふものは優美にて『古今集』は殊にその粹を抜きたる者とのみ存候ひしも、三年の恋一朝にさめて見れば、あんな意気地のない女に今までばかりかされてをつた事かと、くやしきも腹立たしくも相成候。先づ『古今集』といふ書を取りて第一枚を開くと直ちに「去年とやいはん今年とやいはん」といふ歌が出て来る、実に呆れ返つた無趣味の歌に有之候。日本人と外国人との合いの子を日本人とや申さん外国人とや申さんとしやれたると同じ事にて、しやれにもならぬつまらぬ歌に候。この外の歌とても大同小異にて駄洒落か理屈ッばい者の方に有之候。

（「再び歌よみに与ふる書」^{（*2）}）

右の文章の中で子規は、『古今集』と、その撰者の一人であり代表的な歌人である紀貫之を、「くだらぬ集」「へたな歌よみ」であると断言する。くだらない歌の代表とされているのは、『古今集』春歌上巻の巻頭を飾る「年内立春」の歌である。

ふる年に春立ちける日よめる 在原元方

年のうちに春は来にけり一年を去年とや言はむ今年とや言はむ

（『古今集・春上・一』）

旧年中に立春となつた日に詠んだ歌

暦の上ではまだ十二月だというのに、早くも春が訪れた。この一年を去年と

言おうか、それとも今年と言おうか。

「年内立春」とは、暦上の元旦よりも先に立春が訪れる現象である。平安時代に用いられていた暦は、月の満ち欠けの周期と太陽の一年間の運行の双方を生かした、太陰太陽暦である。本来なら、元旦と立春（冬至から数えて四十五日目）が一致するのが望ましいのだが、太陽と月のサイクルが微妙にずれているために、年によっては立春が元旦に先行する、つまり旧年中に立春を迎えることもあった。こうした現象を「年内立春」といい、平安時代には案外ありふれたことであつた^{（*3）}。

『古今集』は、暦の小さな矛盾を面白がり、予定よりほんの少し早くやってきた春を寿ぐことから始まる。子規が「駄洒落」と切つて捨てた「去年とや言はむ今年とや言はむ」という疑問は、いかにも『古今集』らしい「春の喜び」の表現なのである。

ちなみに『古今集』巻頭歌は、平安時代はいうまでもなく江戸時代の末期にいたるまで、文学作品の中に大きな影響を与え続けた。平安末の歌人藤原俊成は、歌論書『古来風体抄』の中で「この歌、まことに理強く、また、をかしくも聞えて、ありがたく詠める歌なり」と激賞しているし、「年内立春」そのものも、古典和歌の重要な歌題（和歌を創作する時のテーマ）の一つとして定着している。その影響は和歌というジャンルの壁を越えて、広く俳諧や狂歌にも及んでいることが指摘されている^{（*4）}。近代以前に、この歌には、長く豊かな享受の歴史があつた。

子規の主張をもう少し追ってみよう。先に引用した部分に続いて彼は、実は『古今集』にも褒めるべき点があるといい、それは『万葉集』以外に新しい歌風を生み出したことであると述べて、そして問題なのは『古今集』の模倣に終始した後世の間であるとして、

何代集の彼ンのと申しても、皆古今の糟糠の糟糠の糟糠ばかりに御座候。

（「再び歌よみに与ふる書」）

と酷評する。子規が攻撃しているのは、『古今集』そのものよりも、伝統を墨守しつづける態度や、旧態依然たる歌に甘んじている同時代の歌人たちなのであつた。しかしながら、子規の文章は、その生き生きとした筆致の力もあって、彼の思惑以

上に『古今集』を痛めつけたのではないだろうか。大岡信氏が、『古今集』や紀貫之の名誉回復を図る立場から、次のように述べていることが首肯される。

彼自身は必ずしも古今集や貫之そのものをまなじりを決して否定しようとしたのではないにもかかわらず、「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集」という冒頭の挑発的な断言は、正確に、深々と、たぶん子規自身の意図をものるかに上回るセンチシヨナルな影響力をもって、明治三十年代の詩歌界に突き刺さった。
 (『紀貫之』*5)

幕末に地方の下級士族の子として生まれ、志をもって上京し、その短い生涯において短詩型の革新運動を担うことになった子規には、雅やかな文学の中心と目されてきた『古今集』の伝統を、ひとたび断ち切ってみせる必要があった。子規の文章は、現代の私たちにも訴えかける力を持つが、その主張するところは、彼の生きた時代の価値観に規定されたものでもある。

歌の読み方、あるいは文学の読み方には、豊饒な多様性があつてよいであろう。私たち、特に国語教育に関わる者は子規の呪縛から自由になってよいのではないかと多くの人にとって、古典和歌との最初の出会いの場は、小学校や中学校の授業なのである。

三 子規の中に生き続ける古今集

「あんな意気地のない女に今まではかされてをつた事か」と覚醒したはずの子規であつたが、では彼の歌は本当に、『古今集』の伝統から切り離されているのだろうか。

たしかに『古今集』歌を特徴づける序詞・掛詞・縁語といったレトリックは、子規の歌にはほとんど見られない(枕詞は時折見られる)。しかし、その感情や感性の中には、おそらく彼自身も意識しないままに、『古今集』の余韻が残っているのではないか。次に挙げるのは、死の前年にあたる明治三十四年(一九〇一)の五月四日に詠まれた、「しひて筆をとりて」と題する連作十首からの抜粋である。

佐保神の別れかなしも来ん春にふたたび逢はんわれならぬに

(十首中の一首目)

いちはずの花咲きいでて我目には今年ばかりの春行かんとす

(十首中の二首目)

別れゆく春のかたみと藤波の花の長ふさ絵にかけるかも

(十首中の五首目)*6

この年、子規の病状(脊椎カリエス)は、悪化の一途をたどっていた。子規庵の庭に咲く春の草花を見るにつけても、これが最後の春、最後の花ではないかと思われる。いちはず、牡丹、山吹、藤、薔薇と一つ一つの花を歌い、慈しみながら、子規は自分の命をも愛惜する。

掲出歌一首目の「佐保神」は春の女神のことで、別名「佐保姫」ともいい、古典和歌にしばしば用いられる歌ことばである*7。子規は去っていく春を擬人化して、別れを悲しみ、「来ん春にふたたび逢はんわれならぬに」——来年やってくる春に再会できる我が身ではないのに、と歌う。

二首目の「いちはず」はアヤメ科の花で、五月頃に白や紫色の花が咲く。梅が終わり、桜も散つて、とうとう「いちはず」が咲いた。子規にとっての最後の春が過ぎて行くこうとしている。

次は「藤」の歌。「いちはず」が古典和歌には用例の少ない花であるのに対して、「藤」は春の終わり、あるいは夏の始まりを告げる花として、長く詠み継がれてきた。「藤波」も古典和歌由来のことば。子規の藤の歌としては

瓶にさす藤の花ぶさみじかければ畳の上にとどかざりけり

(明治三十四年四月)

が広く知られており、「その主張する写生の方法を順直に実践した歌」と言われるが*8、「別れゆく」の歌では、「藤」はありのままの事物ではなく、「春のかたみ」として見つめられている。この連作について粟津則雄氏は、「対象を見るまなざしとおのれのいのちを見るまなざしとがひとつとけあつていて、その姿はまことに美しい」と評しているが*9。そのような自然と人事の融け合った様は、実は『古

『今集』と通じあうものではないか。

四 惜春の歌

去つて行く春を惜しむことを「惜春」という。散る花を嘆き、春の時間を惜しむことは、『古今集』春歌に遍在するテーマであった。移ろっていく春や花と、人生や命を重ねて考える歌は、『古今集』の中にしばしば見られるのである。たとえば次のように。

春ごとに花の盛りはありなめどあひ見むことは命なりけり

(古今集・春下・九七・よみ人知らず)

春が来るごとに、花盛りの時は必ずあるはずだけれど、それに出会えるのは、命があつてのことだなあ。

花のごと世の常ならば過ぐしてし昔はまたも帰り来なまし

(古今集・春下・九八・よみ人知らず)

花が毎年咲くように、この世が変わらないものであったなら、過ぎてしまつた昔も、また帰ってくるだろうに。

また『古今集』の中には、子規の「別れゆく」の歌のように、季節を擬人化して、その「形見（＝思い出のよすが）」を詠じる歌もある。

梅が香を袖に移して留めてば春は過ぐとも形見ならまし

(古今集・春上・四六・よみ人知らず)

梅の花の香を袖に移して留めておいたなら、春が過ぎてしまつたのちも形見の品になるだろう。

桜色に衣は深く染めて着む花の散りなむ後の形見に

(古今集・春上・六六・紀有朋)

着物は桜色に深く染めて着よう。花が散ってしまったのちの形見の品となるように。

ちなみに、季節の形見という発想は『万葉集』には未だ見られず、『古今集』から始まって、後の時代の歌に受け継がれていく。

そして、春歌下巻の最末尾には、「惜春」の思いを正面から詠じた歌群（一二六番歌～一三四番歌）がある。その中の二首を見てみよう。

寛平御時后宮歌合の歌

藤原興風

声絶えず鳴けや鶯一年にふたたびとだに來べき春かは

(古今集・春下・一三二)

三月の晦日の日、雨の降りけるに藤の花を折りて、人につかはしける

在原業平

濡れつつぞしひて折りつる年のうちに春は幾日もあらじと思へば

(古今集・春下・一三三)

一三二は、一年に二度とない春なのだから、声を絶やさずに鳴いておくれ、と鶯に呼びかける歌である。一三三は、六歌仙の一人である在原業平の歌。この歌には『古今集』としては長めの詞書（歌集において和歌の前に付される、歌が詠まれた事情を簡単に伝える文章のこと）があつて、三月末の雨の日に、藤の花——前述のとおり春の最後の花である——を折りて、人に贈る時に添えたものであることが知られる。歌意は、「雨に濡れることも厭わずに、あなたのために折り取つた藤の花なのです。一年のうちに春はもう幾日も残っていないと思うので」というもの。いずれの歌も、春の名残を惜しみ、二度とない時間を最後まで楽しみ尽くそうという思いを詠じている。享樂的であるともいえるが、その底には、時が無常であることへの悲しみが潜んでいる。

このような『古今集』の感性は、子規の「しひて筆をとりて」連作の中に流れている気分と重なっているであろう。これが最後の春だという感慨を抱いたとき^{(*)10}、子規の中に消え残っていた『古今集』の「こころ」や「ことば」が呼び覚まされて、これらの歌が生まれているのではないだろうか。子規は連作の末尾に「心弱くこそ人の見るらめ（何と気弱なことかと人は見るだろう）」と添え書きをしているが、この連作の中には、創作者である子規自身をも戸惑わせるような、不可思議な古典和歌の力が働いているといえよう。

五 私たちの「ことば」と「こころ」を耕す

古典和歌と近代短歌のあいだには、三十一文字の定型以外にも、さまざまな連続性がある。その連続性は、古典和歌の伝統を否定して見せる所から出発した正岡子規の、最晩年の名歌の中にも認められるのであった。古典和歌と近代短歌のあいだを行きつ戻りつしてみることから、「歌」を読むための新しい視点が開けてくる。そうした試みは、現代の私たちの「ことば」と「こころ」を豊かに耕すことにもつながっていくであろう。

* 『古今和歌集』の引用は、小町谷照彦氏校訳注『古今和歌集』（ちくま学芸文庫・二〇一〇年）によるが、私に漢字をあてた箇所がある。

【注】

(1) 品田悦一氏『万葉集の発明―国民国家と文化装置としての古典―』（新曜社・二〇〇一年）は、「国民文学万葉集」というキヤッチフレーズが明治中葉に創作されたものであったことを解き明かしている。

(2) 引用は『子規全集 巻七』（講談社・一九七五年）による。
 (3) 神尾暢子氏「在原元方と立春映像」（『王朝国語の表現映像』新典社・一九八二年）によれば、平安時代中期において、年内立春は平均して一・七年に一回の頻度で起きている。

(4) 鈴木健一氏「年内立春歌の転生」（『江戸古典学の論』汲古書院・二〇一一年）。

(5) 大岡信氏『紀貫之』（筑摩書房・一九七一年）。

(6) 引用は、久保田淳氏監修・村尾誠一氏校注『竹乃里歌 和歌文学大系25』（明治書院・二〇一六年）による。

(7) 『古今集』には「佐保神」は見られないが、秋を擬人化した「竜田姫」を詠んだ歌はある。「竜田姫手向くる神のあればこそ秋の木の葉の幣と散るらめ」（秋下・二九八・兼覧王）。

(8) 木俣修氏『近代短歌の鑑賞と批評』（明治書院・一九六四年）。

(9) 粟津則雄氏『朝日評伝選 正岡子規』（朝日新聞社・一九八二年）。

(10) 子規が亡くなるのは翌年の九月十七日である。彼はもう一度、春に会うことができた。